
ミルトニアの幻想曲

壺花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルトニアの幻想曲

【Nコード】

N7041Y

【作者名】

壺花

【あらすじ】

記憶をなくした直樹と、おかしい空間で出会った人形のアンジェリカ。

行動をともし記憶を取り戻すために様々な体験をする。

「さあさ。思い出して御覧なさい」

ブローグ

ふう…と息を吐く。

春にはなったが、まだ寒い空気が肌をチクチクと攻撃してくる。
屋上から見渡す空は雲行きは怪しく、見事なまでの灰色の空はまるで僕の心を表しているみたいでちよつと笑いが込み上げてきた。

どこまで頑張れば認めてもらえるのだろうか？

どこまで耐え続ければ分かってくれるのだろうか？

なんで、なんで、僕なんだろうか…？

そんなことはどうでもいいのか。

もう、決めたんだから…

「……………」。

一言だけつぶやく。

そのあと、女生徒の悲鳴とバサバサと鳥たちの羽根の音が聞こえた
ところで僕の意識はブラックアウトした。

おわりのはじまり

真っ白な空間で僕は目を覚ました。

地に足がついた感覚があるのに、おかしいことに全体が白いと宙に浮いているんじゃないかと思う。

……それと果てしのない恐怖感が僕を襲ってきていて、思考が何処となく不安定だ。

いつも頭で考えてから行動する僕にとっては思考が止まるということとは、まさに蛇に睨まれた蛙状態だ。これからどうするのか、そもそも僕は一体誰なのか……

……頭がズキズキと痛み、思わず頭に手をやる。何処となく全身が痛む気がする。

思い出そうにも痛みに蝕まれたせいかな答えはせず、一先ずは辺りを見渡す。

近くに不自然な真っ黒の扉がポツンとあり、とりあえずその扉を開ければ何かがあるのではないか？ そう思い扉に近づこうと歩き出す。

「……に……ん、おにーちゃんっ」

かすかに聴こえた声に反応して後ろを振り替える。

そこには真っ白な服に身を包んだ少年がいた。

初めて会ったのどこか懐かしく見たことがある気がするのとはなぜな

んだろうか…

くすくすと笑う少年に対して未だにこの状況に不安と恐怖を抱いた僕は、どうすればいいか分からずに彼を見つめていた。すると彼はトコトコと走っていつてしまう。

「あ、待って!!」

思わず彼を追いかける。

彼を放っておいて目の前の黒い扉を開けることもできたが…何故だか、追いかけないといけない気がしたのだ。

すぐに追いつくであろう距離なのになかなか縮まらない。

いくら運動が得意ではないと言え、子供の足に追いつくなんて造作もないはずなのに彼との距離はどんどん離れていく。

…息が乱れて苦しい。何処まで彼は走り続けるのだろうか？

もう限界だ、なんて考えた瞬間…彼の足は止まりこちらを振り返って見ていた。

その顔には笑みが浮かんでおり、走った疲れなんて微塵も感じさせていないようだった。

息を整えながらゆっくりと彼に近づく。

よくよく見れば、また不自然な扉が彼の隣にあった。

今度は黒ではなくアイボリーなので景色と同化していて、普通であればわからないだろう…

「君…」

「ボクはここまで。」

にこりと彼は再び笑う。

「…君は一体何者なの？」

「覚えてないか…。うん、そうだよね」

残念そうに一度顔を下に向けたが、顔をあげると眉は寄せているものの精一杯の笑顔を見せていた。

「ボクは……………」

「え？」

何か彼は口にしたが聞き取れず聞き返す。それにも彼はまた同じ笑みを張り付けている。

「お兄ちゃんは、この扉の先に行つて」

そうすれば大丈夫だから。と彼は笑うと今度こそ何処かへ行つてしまった…

さつきは何処に行くか見えたのに、今回は消えたようにいなくなつてしまい彼に伸ばした手は行き場をなくした…
そして代わりに、彼が言ったように扉の先に進むため取っ手を掴んだ。

さっきの少年は何だったのか…気になるがいつまでもこんな白い空間にいるのも気が狂いそうになる。

扉の先に何があるかは分からないが、この先に行くしかない。

深呼吸を一つ。

何故だか少年の言うとおり進めば大丈夫な気がして、ゆっくりと扉を開く…

「なんだよ…今度は」

深いため息を一つ。今日の僕はとことん運がないらしい…

先ほどいた真つ白な空間も変だとか恐いと思っていたが、少年に導かれ扉を開けた先は上下も分らないおもちゃ箱みたいな空間に出ていた。

あんの糞ガキ：僕をハメたな。

そんなことを考えつつも、周りを見渡せばちょうどクッションが置かれた山の近くに椅子があるのが見えた。さすがに気持ちが疲れたので座って休みつつ、これからのことを考えよう。

椅子に座って再び深いため息をつく。誰かがため息をつくときと幸せが逃げる、なんて言っていたがそんなこと気にしてはいられない。

むしろ現状が最悪だよ。これ以上悪くなるなんてたかが知れてるだろう心の中で悪態をつきながら、今までのことを整理する。

否、その前に僕は何をしていた？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7041y/>

ミルトニアの幻想曲

2011年11月21日09時39分発行